本棚ぶらり

テーマ

オリンピック・パラリンピック

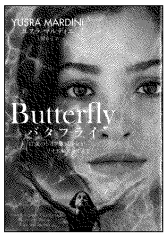
『オリンピックの真実』

佐山和夫（さやまかずお）／著
潮出版社　2017 年

19 世紀の末、フランスのクーベルタン男爵が、古代ギリシャのオリンピックに範をとったスポーツ大会を近代に復興しようと思い始めた頃、すでにイギリスでは、「オリンピック」の名を冠するいくつかのスポーツ・イベントが行われていた。最も古いものは 17 世紀初頭に始まり、現代もなお続いているのだという。

それらイギリスの「オリンピック」は、誰がどのように始めたのか。そして、近代オリンピックの構想を固めていくクーベルタンに、どのような影響を与えたのか。著者は、イギリスにゆかりの地を訪ねて取材を重ね、考察を深めていく。先例の優れたところに学びながら、自ら理想とする近代オリンピックを作り上げようとしたクーベルタンの姿勢が印象的だ。

『バタフライ―17歳のシリア難民少女がリオ五輪で泳ぐまで―』



ユスラ・マルディニ／著
ジョジー・ルブロンド／著
土屋京子（つちやきょうこ）／訳　朝日新聞出版　2019 年

2016 年のリオオリンピックでは、世界中の難民に希望を与えることを目的とした「難民五輪選手団」が編成された。本書はこの選手団の一人であるユスラ・マルディニがたどった祖国・シリア出国からリオオリンピック出場にいたるまでの物語である。

幼いころからオリンピックを目指して水泳に打ち込んできた彼女は、内戦の激化により、姉とともにドイツへ渡る。海ではゴムボートが転覆しかけたり、ハンガリーでは警察に追われたり、旅は危険の連続だった。ついに念願の水泳を再開することができたが、難民の女の子がオリンピック出場の夢を叶えるとは誰も予想していなかった。

難民に対する偏見や祖国に残る人々への罪悪感に打ちひしがれながらも、ユスラはオリンピック出場に希望を見出す。彼女はオリンピック出場を通して何を伝えようとしたのか。

『TOKYO オリンピック物語』

野地秩嘉（のじつねよし）／著
小学館　2011 年

数多くの選手たちの活躍が今も語り継がれている 1964 年の東京オリンピック。しかし、本書の主役は、そんなスポーツヒーローたちではない。オリンピックを裏で支える組織や運営システムを作り上げた人たちだ。それまでは、競技の結果を記録して着順をつけるためには人手や時間を必要とした。しかし、世界初のコンピュータによる“リアルタイムシステム”により、選手たちがゴールをするとすぐにオンラインで順位とタイムが表示される画期的なシステムを開発して成功を収めた。1964 年の東京オリンピックが日本の経済社会にもたらした大きな変革を知ることができる一冊、この機会にぜひ読んでいただきたい。

『パラリンピックの楽しみ方―ルールから知られざる歴史まで―』

藤田紀昭（ふじたもとあき）／著
小学館　2016 年

パラリンピックでは選手の努力はもちろんのことですが、用具の開発が記録や勝敗に大きく貢献してきました。例えば、車いす。わたしたちが普段見ている車いすとは異なり、競技の特徴に合わせて形状や強度を変えています。陸上競技用車いす「レーサー」は空気抵抗を抑えて高速走行することができ、パラリンピックの車いすマラソン世界記録はオリンピックのマラソン世界記録を大きく上回っています。

本書は、パラリンピックの競技のルールや魅力だけではなく、障害者スポーツの変遷や現在のパラリンピックが抱える問題、そして東京 2020 パラリンピック以降の問題にいたるまで知ることができる一冊です。